

「アダム・スミスの価値尺度論」に 関連する S. ホランダールの所論（1973年）

——「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究(15)：1970年代(その4)——

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1、第2、第3、第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第6巻第1、第2、第3、第4号および第7巻第2号において1960年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、なし、そしてそれにつづいて、本誌第9巻第1、第3号および第10巻第1号では1970年代に発表されたいくつかの個々の研究の内容を整理しようとしてきた。

本稿は、前三稿にひきつづき、1970年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた個々の研究の内容を整理する試みの一部として、1973年に出版された S. ホランダール (S. Hollander) の一著書のなかで示されている「アダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつホランダールの

所論の内容を整理しようとするものである。

S. ホランダール (1973)⁽¹⁾

ホランダールの1973年の著書には、彼のつぎのような見解がふくまれている。

① 「競争」ということはスミスにとって多くのことを意味していたのであり、そして競争的賃金率構造についての彼の所論は、彼が『国富論』のなかで「真実価値」(‘real value’)として言及しているものの尺度として「支配される労働」(‘labour commanded’)を使用することを正当化するのにも、役立っていたのであるが、スミスは、一商品のあるいは全体としての諸商品の「真実価値」をその名目価値すなわち「貨幣での価格」とは別のものとしてのその「労働での価格」として定義している。そしてそこで論点は、現在では広く認められているように、空間および時間にわたっての「実質所得」(‘real income’)の変化を秤量するという近代的「指数」問題と符合するものである。⁽²⁾

② なお、たとえばシュンペーター (J. A. Schumpeter) の考えていたように、もしもスミスが指数技術を知っていたならば彼は、特定諸財貨の名目価格をある一般的な物価水準 (a general level of prices) のタームで表していたかもしれない、ということが示唆されてきた。たしかにそうである。だが、ニュメレールの特定のな選択はまた、ある規範的な意味を持っているのである。それゆえそのような所見は、社会会計単位としての労働の特殊な規範的含意を考慮していない、といえるのである。⁽³⁾

③ また、以上のような見地から、そこで扱われるのは経験的な関連性をもったモデルにおける価値の論理的導出といったことではなく、したがって「交換価値」の理論 (theory of ‘exchange value’) といったことにかかわるものではないということが、強調されてきた。これは正当なことである。⁽⁴⁾

④ ところで、スミスの議論においては労働という尺度はどのようにし

てその機能を果たすかといえ、それはつぎのような脈絡においてである。まず、スミスは、個人の福祉 (well-being) は究極的には消費財に対する彼の支配力の関数であるということを明示している。⁽⁵⁾ところが専門化の導入は、個人によって消費される財貨の大部分は他人の労働によって生産されるということを、意味する。そこで、一商品によって支配される労働が、その商品の一般的購買力の一つの指標を提供するのである。⁽⁶⁾スミスの議論においては、「真実価値」という用語は、まず、消費財に対する購買力ということにあてはまり、そして、労働に対する支配力は、消費財に対する購買力への間接的な手段としての役割をもつ〔したがってまた、労働に対する支配力は、消費財に対する購買力のすなわち「真実価値」の指標、間接的尺度ということになる〕⁽⁷⁾のである。他方、さらに、「真実価値」という用語には、生産の努力費用 (effort cost of production) という点からの支配労働〔つまり、労働不効用に対する支配力という意味での支配労働〕という第二の含意が存在するのであり、⁽⁸⁾そしてそのことをヨリ明確に示しているスミスの叙述 (W. N., p. 33. 大河内訳〈I〉57-58ページ。)にしたがえば、「高価なもの」とは、たんなる時間の単位数というよりもむしろ努力によって引き起こされる不効用という点からみて、「入手するのが困難なもの」〔つまり、多くの労働不効用を支配しうるもの〕に当たるということになる。⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾のである。

⑤ しかしながら、1時間の作業は、不効用の——まつわる「時間と骨折り」の——はっきりとした尺度とはみなされえなかった。というのは、「耐え忍ばれる辛さや、用いられる巧妙さのさまざまな度合い」が考慮に入れられなければならないからである (W. N., p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。⁽¹¹⁾そして、この難点の大まかな解決は、現実には、辛さや巧妙さの相対的な度合いを賃金構造のなかに大まかに反映させることとなる「市場のかけひきや交渉によって」、提供される、とされるのであった (W. N., p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ)。したがって、賃金単位数に換算しての——おそらく不熟練労働に当てはまる率を使用しての——産出物の価

値が、いま求められている意味でのすなわち「労苦と骨折り」という意味での「支配される労働」の、完全ではないとしてもまずまずの尺度を提供するであろうというのが、スミスの見解であるように思えるのである。⁽¹²⁾

⑥ なお、スミスは、この意味での1単位の労働に対応する究極的な心的費用は時および場所をつうじて不変なものであると考えるという基本的な考えを明確にしてつぎのように述べている。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものということができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。」(W. N., p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。)ところで、この命題は、形式のうえでは、単一の労働者の場合に主張されている。しかし実際上は、それは全体としての労働にひろげられているのであって、そのため、不効用の基数的測定ということだけでなく、個人間の比較の可能性ということ、またより強く、個人間の労働不効用関数の同一性の想定ということも、含意されているのであり、そして、「それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である」(W. N., p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ。傍点の付されている箇所はホルンダーがイタリック体にしてある箇所。) ⁽¹³⁾

⑦ 上の議論からして、1時間の熟練作業は、訓練に伴う蓄積された労苦と骨折りの一部分を組み入れるものと想定されていることは、明らかである。⁽¹⁴⁾ このことのゆえに、スミスは、「巧妙さ」の程度の格差をそれに対応する不効用の程度の格差に還元することができるのである。なお、賃金構造の決定についてのより完全な説明はあとのほうで、つまり、『国富論』第1篇第10章で、与えられており、そこでは、金銭上の格差を埋め合わせる五つの主要な特徴が、⁽¹⁵⁾ 周知の議論のなかで、区別されているのである。

(注)

(1) 本稿では、Samuel Hollander, *The Economics of Adam Smith* (Toronto:

University of Toronto Press, 1973)——以下, Hollander [1973] と略記する——
〔小林昇監修, 大野忠男, 岡田純一, 加藤一夫, 斎藤謹造, 杉山忠平訳『アダム・スミスの経済学』(東洋経済新報社, 1976年)〕のなかで示されているホランダーの所論をみる。

- (2) Hollander [1973], p. 127. 邦訳, 179ページ。
- (3) Hollander [1973], p. 127, p. 127n. 40. 邦訳, 179ページ, 203ページ注40。
- (4) Hollander [1973], p. 127. 邦訳, 179ページ。
- (5) ホランダーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「人が富んだり貧しかったりするのは, 人間生活の必需品, 便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited...by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library (New York: Random House, 1937)——以下, *W. N.* と略記する——, p. 30. 大河内一男監訳『国富論』(全3巻), 中央公論社, 1976年——以下, 大河内訳と略記する, ただし, 本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——〈I〉, 52ページ。) Hollander [1973], p. 127. 邦訳, 180ページ。
- (6) ホランダーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「……およそ商品の価値は, それを所有していても自分では使用または消費しようと思わず他の商品と交換しようと思っている人にとっては, その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ, 労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(*W. N.*, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。) Hollander [1973], pp. 127-128. 邦訳, 180ページ。
- (7) なお, ホランダーは, このことに関連して, つぎの三点を指摘している。④「支配される労働」という指標をスミスは『国富論』をつうじて広く適用していることからみて〔ホランダーは, その指標はたとえばさまざまな事情のもとでの地主の福祉を見積もるために適用されており, またそこでは「真実価値」によってスミスは商品に対する購買力を指しているということは明らかである, として, つぎのようなスミスの文章を引用している。「その国で労働者がふつうに扶養されている率がどうであろうとも, このより大きな剰余はつねにより多量の労働を維持しうるだろう。したがってまたその地主はより多量の労働を購買, 支配しうるであろう。彼の地代の真実価値, つまり彼の実力と権威, 他の人々の労働が彼に提供しうべき生活必需品と便益品に対する彼の支配力は, 必然的にはるかに大きなものとなるだろう。】(*W. N.*, p. 159. 大河内訳〈I〉, 265-266ページ。) Hollander [1973], p. 128n. 42. 邦訳, 203ページ注42。], この指標は, たんに単純な状態のために企図されていただけでなく, 「労働に対する支配力」が(他の

諸要素が産出に対して寄与するために)「諸商品に対する購買力」を不十分にしか保証しない複雑な経済においても、ヨリ不満足な仕方においてはああるが、明らかに役立つ、と考えられている。⑤ [『国富論』第1篇第6章における、]商品に体化されている労働 (*labour embodied*) がその商品の労働に対する支配力とたまたま一致するような初期の社会についての議論のなかでのこの指標の手始めの導入ということが、一つの労働価格説 (*a labour theory of price*) が間違つてスミスに特徴的なものとみなされることになったということにあずかるところが大きかった。⑥ また、労働生産性の継続的な上昇が実質購買力についてのこの選定された指標を全面的に不適切なものにしてしまうことはなからうとスミスはみていた、ということも含意されている。Hollander [1973], p. 128. 邦訳, 180ページ。

- (8) このことを示す一例としてホランダーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「あらゆる物の真実価格 (*real price*), すなわち、どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得した人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値うちがあるかといえは、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。』(*W. N.*, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。) Hollander [1973], p. 128. 邦訳, 180ページ。
- (9) なお、ホランダーによれば、ここでの問題が配分についての一般的分析のなかで特別の関連性を帯びるのは、この見地からである、とされる。Hollander [1973], p. 128. 邦訳, 181ページ。
- (10) Hollander [1973], pp. 127-128. 邦訳, 179-181ページ。また、以上のことに対応して、ホランダーは他のところでつぎのような指摘をなしている。すなわち、スミスが「真実価値」の支配労働指標 (*labour-commanded index of 'real value'*) を選択したことには二重の目的があった。一方では、その指標は、国民所得に対応する努力という相対物に相応するところの不効用といったものの尺度を提供することが、意図されていたのであり、他方では、その指標は、「人が富んだり貧しかったりするの、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる」ということから、諸商品に対する購買力の間接的尺度たるものが、意図されていたのである。Hollander [1973], pp. 135-136. 邦訳, 188ページ。
- (11) ホランダーは、さらに、つぎのようなスミスの文章を引用している。「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はげむばあいのほうが、通常のわかりきった業務で1ヶ月働けばあいよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。』(*W. N.*, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。) Hollander [1973], pp. 128-129. 邦訳, 181ページ。

- (12) Hollander [1973], pp. 128-129. 邦訳, 181ページ。
- (13) Hollander [1973], p. 129. 邦訳, 181ページ。なお、ホランダールは、スミスは賃金単位(おそらく不熟練労働に当てはまる賃金単位)を使用することによって「労苦と骨折り」という意味での「支配される労働」の大きさを、たとえ完全にはないとしてもまずまず知ることができると考えた、とするのであるが、このことに関連してホランダールはさらに、本稿で取り扱っている彼の著書の注の一つ(Hollander [1973], pp. 129-130n. 46. 邦訳, 203-204ページ注46.)において、つぎのような見方を示している。

(1) スミスは、そのようなやり方には〔労働の時価——賃金単位の大きさ——を知らなければならないという〕統計上の困難性が存在すると考えたのであるが、そのことについてはスミスはつぎのような見解を示している。すなわち、「ところが、離れた時と場所では労働の時価が多少とも正確にわかるということはほとんどありえない。一方、穀物の時価は、規則正しく記録されている場合はわずかしかないが、一般には労働の時価よりもよく知られていて、また、よりしばしば歴史家その他の著述家たちによって注目されてきた。それゆえわれわれは、一般的には穀物の時価で満足しなければならないのであって、そうするのは、穀物の時価が労働の時価とつねに正確に同一割合にあるからというのではなく、ふつう入手できるもののなかでは、その割合にいちばん近似的なものであるからである。」(W. N., p. 38. 大河内訳〈I〉, 65-66ページ。さらにホランダールは、W. N., p. 482 [大河内訳〈II〉, 219-220ページ]を参照するよう指示している。)

(2) また、スミスが穀物を〔「労苦と骨折り」という意味での「支配される労働」の大きさの程度を知るために〕選んだのは、穀物賃金の長年にわたる動きからみでの次善の選択でもあった。スミスはこのことをつぎの行文のなかではっきりと示している。すなわち、「遠くへだたった時点では、等量の、金銀またはおそらく他のどんな商品をもつてするよりも、労働者の生活資料である穀物の等量をもつてするほうが、よりいっそう等量に近い労働が購買されるであろう。それゆえ、遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値に近いものをもっている。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量に近いものを購買または支配することができるだろう。ここでことわっておくが、穀物の等量のほうが、他のどんな商品の等量よりもいっそうこの任務を果たしやすいというだけのことである。穀物の等量ですらも、この任務を正確に果たすものではないからである。労働者の生活資料、すなわち労働の真実価格は……場合によって非常に異なることがある。……しかしながら、他のどんな商品も、ある特定の時点では、それがそのときに購買しうる生活資料の量に比例して、より大きい量の労働、またはより小さい量の労働を購買するであろう。それゆえ、穀物で納めることになっている地代は、一定量の穀物が購買しうる労働の

量の変動から影響をこうむるだけである。ところが、他のなんらかの商品で納めることになっている地代は、ある特定量の穀物が購買しうる労働の量の変動からだけでなく、ある特定量のその商品で購買しうる穀物の量の変動からも、影響をこうむるのである。」(*W. N.*, pp. 35-36. 大河内訳〈I〉, 61-62ページ。)

(3) なお、スミスは穀物の選択をさらに、穀物はほぼ一定の費用で生産されるという理由から、正当化しているが(*W. N.*, p. 187. 大河内訳〈I〉, 309ページ。), この議論は、穀物賃金は労働市場での需要と供給の状態にもっぱら依存することからいって、称賛しがたいものである。

なお、以上でみてきたスミスの議論における「穀物」についてのホランダールの見方のうち(3)のところでは、ホランダールはおそらくつぎのことを言っているのであろう。すなわち、スミスの議論では、穀物は労働者の生活資料であるため、等量の穀物は、長期的には、他のどんな商品の等量をもってするよりも、等量に近い労働を支配する、と考えられている。したがってまた、1単位の労働を支配する穀物の量〔穀物賃金(単位)の大きさ〕は長期的には相対的に安定的ということになる。しかし、1単位の労働を支配する穀物の量〔穀物賃金(単位)の大きさ〕自体を規定するものはもっぱら労働市場における需要と供給であって、穀物の生産費そのものではない。したがって穀物の生産費がほぼ一定であるということは、必ずしも、穀物賃金(単位)の大きさが安定的、またそれゆえ等量の穀物は等量に近い労働を支配するという理由にはなりはしない。この意味で、穀物を選ぶこと理由として穀物の生産費がほぼ一定であるということをおけるこのスミスの議論は、称賛しがたいものである。

また、スミスが穀物を取りあげたことに関する以上(1), (2), (3)でみたホランダールの取り扱いからして、ホランダールは、そこでのスミスの議論を、おおむねつぎのようなものとして考えているということができよう。すなわち、賃金単位数に換算しての——おそらく不熟練労働に当てはまる率を使用しての——産出物の価値〔労働の時価ではかった産出物の価値、産出物の貨幣価値／(おそらく不熟練労働に当てはまる率)賃金単位 → 「支配労働量」〕が「労苦と骨折り」という意味での「支配される労働」の完全ではないとしてもまずまずの尺度を提供するであろうというのがスミスの見解であったように思えるのであるが、離れた時と場所では労働の時価を多少とも正確に知るのはほとんど不可能であるということから(統計上の困難性)、それに代わるものが求められることとなった。スミスは、穀物の時価は労働の時価よりもよく知られており、しかも、穀物の時価は、ふつう入手できるもののなかでは、労働の時価ともっとも同一割合に近い関係をもつもの、と考えた。さらにスミスは、穀物は労働者の生活資料であるため、長期的には、等量の穀物は、他のどんな商品の等量をもってするよりも、等量に近い労働を支配する、とした。かくして、長期では、産出物の貨幣価値を穀物価

格ではかつてその産出物に対応する穀物の量〔産出物の貨幣価値／穀物価格〕を知ることによって、その産出物が支配しうる労働量の程度を知ることができ、異時点間にわたってのその比較が可能ということになる。このような意味でスミスは穀物を次善のものとして選択したのであった。ただし、その選択をさらに正当化するためにスミスは穀物の生産費はほぼ一定であるということをおげているが、それは、その真価を認めることの困難なものである。

なお、ホランダールは、「真実価値」の指標という問題はすでにフランシス・ハチソン(F. Hutcheson)によって提起されており、穀物諸価格が必要な系列として示唆されていたのであり、また、そのことに関するハチソンの主張はプーフENDORF(S. von Pufendorf)の主張と共通するところが多い、ということを指摘している。それについては、Hollander〔1973〕, pp. 129-130n. 46(邦訳, 203-204ページ注46)の終わりのほうを見よ。

- (14) なお、ホランダールは、『国富論』での、資本の蓄積と土地の占有にさきだつ社会状態という単純な状態での労働費用による価格の説明における一つの重要な制限条件という脈絡のなかにおいても、スミスはこの問題を論じている、とし、そして、事実上そこでのスミスの議論では、さまざまな職業に付随するさまざまな「辛さ」やさまざまな「技能と創意」に対する考慮が賃金率構造のなかになされるということとなっており、そして次にそのような「技能と創意」の相違つまり熟練度の相違による賃金格差——スミスは形式のうえでは特別な技能と創意をもった労働が用いられる職業で達成される高報酬を「そのような才能に対して人々がいだけ高い評価」ということに帰してはいるが(W. N., p. 47. 大河内訳〈I〉, 80-81ページ。)——は当該の熟練を取得するのに費やされる「時間と労働に対する報償」として解されている、とみている。Hollander〔1973〕, p. 130n. 47, pp. 116-117, p. 117n. 13. 邦訳, 204ページ注47, 169ページ, 198ページ注13。

なお、本稿の注7のなかでみたように、ホランダールは、『国富論』でのスミスの議論を取り扱うさいに一つの労働価格説(a labour theory of price)をスミスに特徴的なものとみなすのは間違いである、とみているのであるが(Hollander〔1973〕, p. 128. 邦訳, 180ページ。), 価値理論のスミスの正式の議論は長期的な一般均衡という考え方を築き上げようという一つの試みと考えられるならばもっともよく理解されるかもしれないとした労働量(labour quantity)と、貨幣賃金構造といったことを考慮に入れつつ考えられるものとしての労働費用(labour cost)とを区別するホランダールによれば、キャナン(E. Cannan)によって編集された『グラスゴウ大学講義』では長期的な価格(long-run prices)の決定については労働費用による説明が示され、そこでは、それぞれの商品に対する需要をその費用価格(cost price)で確実に充足させるような労働の配分ということが念頭に置かれつつ、その費用価格と「市場価格」('market price')との関係、価格メカニズムによ

る配分、それに対する攪乱物とその帰結、等々といったことが問題にされているのではあるが、『国富論』ではうえのようなものとしての労働費用による価格の説明は資本の蓄積と土地の占有にさきだつ社会状態という単純な状態にはつきりと限定されており、しかもそこでは攪乱物によって開始させられることになる均衡化過程といったものを分析することによって「労働費用」交換価値説('labour cost' theory of exchange value)についてのきちんとした正当化を提供しようといった試みはなされてはいず、そこでのスミスの議論は、それぞれの商品の価格において資本と土地に対する報酬も考慮に入れられるといった複雑なケースに関わるところの基本的な議論——そしてスミスがあらゆる実際的な関連性をもつものとみなした唯一の議論——への、一つの序説として示されているにすぎないのであって、スミスの所論を評釈するにあたって労働量価値説や労働費用価値説(labour quantity and labour cost theories of value)といったようなことに多大の注意を払うのは正しくない、とみられるのであった。(Hollander [1973], pp. 114-117, 邦訳, 166-169ページを見よ。)

- (15) Hollander [1973], p. 130. 邦訳, 181-182ページ。ホランダーは、スミスがそのような五つの特徴を区別しているものとして『国富論』第1篇第10章におけるスミスのつぎのような文章、つまり、「私が観察したところでは、つぎの五つの事情がある職業における金銭的利得の少ないのおおぎない、また他の職業におけるその利得の大きいのを相殺する主な事情である。すなわち第一に、職業自体が快適であるか不快であるか。第二に、それらの職業を習得するのが簡単で安上がりかそれとも困難で費用がかかるか。第三に、それらの職業における雇用が恒常的であるか不定的であるか。第四に、その職業に従事する人たちによせられる信頼度が大きいか小さいか。第五に、そうした職業において成功する見込みがあるかないか、である。」(W. N., p. 100. 大河内訳〈I〉, 166ページ。)という文章を引用し、そのようなものとしてのスミスの議論についてつぎのような見解を示している。(Hollander [1973], pp. 130-132, incl. footnotes. 邦訳, 182-184ページ, 204-205ページ注48-55。)

(1) この議論は、つぎのような諸仮定にもとづいている。④職業間の労働の移動は制度的諸束縛によって妨げられていない(W. N., pp. 99, 118ff. 大河内訳〈I〉, 165ページ, 197ページ以下。), ⑤さまざまな職業は、利用できる機会が確実にわかるほど「よく知られており、また長年にわたって営まれてきた」、⑥それらの仕事は「それらに従事する人々の唯一、または主要な職業」である——というのは、パートタイムで働く労働者は、とくに低い貨幣報酬を受け入れやすいから——(W. N., p. 114. 大河内訳〈I〉, 190ページ。)

(2) この分析全体をつうじて、訓練の諸費用は、他のどんな投資も報酬を要求するのと同じように報酬を要求する人的資本形成への一投資形態として、取り扱

われている。〔ホランダールは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「彼が習得する仕事は、普通の労働の平常の賃金に加えて、彼の全教育費を、少なくともそれと同等の価値ある資本の通常の利潤とともに回収するだろう、ということが期待されるにちがいない。〕(W. N., p. 101. 大河内訳〈I〉, 168-169ページ。)] すなわちスミスは、考慮に入れられるべき費用として、割愛された所得機会〔ホランダールは、スミスがそのことを示している例として、スミスのつぎのような文章を引用している。「徒弟修業のあいだは、徒弟の労働はことごとく親方のものになってしまう。〕(W. N., p. 102. 大河内訳〈I〉 169ページ。)], 訓練を受けるものために彼の両親が行う扶養、雇主に支払われる直接的訓練費、を含めるのであるが、これに加えて、当の熟練の、必要を満たすに足りるだけの供給を引き続いて確保するためには生業にとどまる期間にわたって熟練者に対してさらに純格差が支払われなければならない、とするのであり、そしてこの純報酬が利子支払いの一形態として解釈されているのである。この純報酬ということとは、訓練の「労苦と骨折り」に関する心的費用ということだけを説明したにすぎない「すぐれた熟練」あるいは「巧妙さ」に対する格差補償についての当初の議論の一つの重要な補足を、表すものである。ところで、その利子報酬は訓練期間中消費を延期することに伴う心的費用に対する一補償として解釈してもさしつかえないかもしれないということが示唆されたことがある〔ホランダールは、その例として、Paul H. Douglas, “Smith’s Theory of Value and Distribution,” in *Adam Smith, 1776-1926: Lectures to Commemorate the Sesquicentennial of the Publication of “The Wealth of Nations,”* by John Maurice Clark and others (Chicago: University of Chicago Press, 1928), p. 83 (越村信三郎訳「スミス論」〈H. W. スピーゲル編, 越村信三郎その他監訳『古典学派——経済思想発展史Ⅱ——』〈東洋経済新報社, 1954年〉中), 10ページ)を、あげている。] のであるが、利子へのスミスの一般的アプローチには、現在の消費の延期を確保するための特別な誘因の必要性を彼が認めているということを示唆するようなものは、なにもないのであり、それゆえまた、その解釈が正当なものであるということは明らかなことではないのである。スミスの分析が不完全なものであるということは事実であるように思える。すなわち、スミスは、利子率の存在を当然のことと考えつつ、ある一定の方向への(たとえば訓練への)どんな投資も他の諸方向において手に入れることのできる「少なくとも通常の率」をきつと取得すると論じたのである。だがこのような近道をするにさいして彼は、外見上の貨幣賃金格差は訓練への投資に対する報酬というものを反映し、そしてそのかぎりにおいて、その貨幣賃金格差は市場によって不効用1単位当たり等額の貨幣報酬ということに帰着させられていることになる、ということを実証することを怠っていたのである。

(3) 残りの補足的事項については、基本的に「職業自体が快適であるか不快で

あるか], という事項は別として, つぎのようなことがいえる。④ [「雇用の恒常性」について:] スミスによって直視されている「雇用の安定性」における諸相違が季節的なものである場合においても, それでもなお, 均衡においては, 「かくも不安定な境遇を考えるとときとして生ぜざるをえない不安なまた失望的な時」(W. N., p. 103. 大河内訳〈I〉, 171ページ。)を償うために, 不安定な雇用のもとにある労働者への年間の報酬のなかにさえ純補償的支払いが現れるであろう, ということが, 認められている。⑤ [「よせられる信頼度」について:] 「信頼」の程度をもって説明される格差という議論は, その真価を認めることのより困難なものである。責任をになうことが心的負担をもたらすという限りにおいてのみ, その議論は, 補償的支払いとしての賃金格差という考え方と両立するものである。たしかにこういった要素は彼の議論のなかに存在しているようにみえる。だがそれに加えて, スミスは, 専門職従事者——医師, 法律家等——の高所得は「それほど重大な信任にふさわしい社会的地位」を彼らに保証するのに必要なものであるということを示唆しているのであり (W. N., p. 105. 大河内訳〈I〉, 174-175ページ。), これは, 一つの不効用補償と解釈することはまずできないのである。(なお, ホランダーによれば, J. S. ミル(J. S. Mill)はこの報酬を一種の独占支払いとして理解した, とされる。)⑥ [「成功の見込み」について:] 均衡においては金銭上の報酬は成功の機会の程度差を考慮に入れたものであるにちがいないという五番目の項目では, スミスは(明らかに), [当該の人々の]必要とされる「退屈で費用のかさむ教育」——訓練という直接的不効用——に対する補償であるばかりでなく競争に失敗した人々のそれに対する補償でもあるものとしての高報酬, といったことを, 念頭に置いていた。ところで, 前述の場合におけるのと同様, この議論が全体の枠組みのなかに容易に収まりうるのは危険を冒すことが一つの不効用であるときだけであるということが指摘されてもよいであろう。ところが実際のところ, 人々はきわだつた成功を収める自分たちの機会を過大評価し, そして, 巨額の利得を得るわずかな可能性しか約束しない専門職に押し寄せるといったスミスのいう傾向——均衡賃金構造の完全な実現を妨げると実際上いわれているところの傾向——は, 危険を冒すことが心的負担ではないということを示唆するものであろう。

またホランダーは, 競争的賃金構造という考えについては本格的な研究はすでに, とくにリチャード・カンティロン(R. Cantillon)とサー・ジェイムズ・ステュアート(Sir J. Steuart)によって, なされていたということはもちろん真実であるということを示唆したうえで, この注でみてきたようなスミスの分析に対するJ. S. ミルのいくつかの批判を, 良好になされた批判として, 紹介している。それについてはHollander [1973], pp. 132-133n. 56, 邦訳, 205-206ページ注56を見よ。
(注15は次ページにつづく)

なお、ホランダールによれば、賃金構造についてのスミスの議論そのものは本来、資源配分の基礎モデルの一つの機軸的部分としてその値うちが判断されるべきであって、たんに労働不効用のタームで定められる国民所得の「**真実価値**」の尺度のための基礎〔たしかにこの脈絡においてもスミスのこの議論は役立っているのではあるが〕としてのみその値うちが判断されるべきではないのであり、そしてこのより幅広い見地からすればスミスのその議論は、めざましい業績だと認められるにちがいない、とされる。Hollander [1973], p. 132. 邦訳, 184ページ。

S. ホランダール (1973) についての覚書：結びに代えて

ホランダールによれば、スミスは一商品あるいは全体としての諸商品の「**真実価値**」をその名目価値すなわち「**貨幣での価格**」とは別のものとしてのその「**労働での価格**」として定義し、「**支配される労働**」を「**真実価値**」の尺度とするのであるが、そこでの論点は、空間および時間にわたっての「**実質所得**」の変化の秤量という近代的「**指数**」問題に符合するものであった、とされるのであった。なお、そのさいホランダールは、たしかにもしもスミスが指数技術を知っていたならば特定諸財貨の名目価格を一般物価水準のタームで表していたかもしれないということは可能ではあるが、そのような見解は社会会計単位としての労働の特殊な規範的含意を考慮していないのであって、ニュメレールの特定のな選択はまたある規範的な意味をもっている、とし、また、そこで扱われているのは経験的な関連性をもったモデルにおける価値の論理的導出といったことではなく、したがって「**交換価値**」の理論といったことにかかわるものではない、とみるのであった。

そしてホランダールによれば、スミスの議論においてはこの「**支配される労働**」という尺度は、消費財に対する購買力としての「**真実価値**」〔ホランダールによれば、これが、スミスのいう「**真実価値**」の第一の含意である、とされるのであった。〕の指標、間接的尺度とされている〔なお、ホランダールによれば、スミスは、消費財、諸商品に対する実質購買力についての

この「支配される労働」という指標、間接的尺度は、労働以外の他の諸要素も産出に対して寄与するために「労働に対する支配力」が「諸商品に対する購買力」を不十分にしか保証しないような経済においてもより不満足な仕方においてはであるがその機能を果たす、と考えていたのであり、さらにまた、労働生産性の継続的上昇ということも実質購買力についてのこの指標、間接的尺度を全面的に不適切なものにしてしまうことはなかろうとみていた、とされるのであった。)とともに、生産の努力費用という点からの支配労働〔つまり、労働不効用に対する支配力という意味での支配労働〕としての「真実価値」、具体的にはたとえば国民所得に対応する努力という相対物に相応するところの不効用といったようなもの〔つまり、国民所得の、労働不効用に対する支配力、といったようなもの〕としての「真実価値」〔ホランダーによれば、これが、スミスのいう「真実価値」のもう一つの含意である、とされるのであった。〕の尺度とされている、とみられるのであった。

また、後者の意味での「真実価値」の尺度としての「支配される労働」に関連して、ホランダーはつぎのような見方を示すのであった。すなわち、(1)スミスの議論では、1単位の労働に対応する究極的な心的費用は時および場所をつうじて不変であるとされ、また實際上、不効用の基数的測定、個人間の比較の可能性、個人間の労働不効用関数の同一性ということが暗に示されており、そしてまた、労働の熟練度の格差は、熟練の獲得に伴う労苦と骨折りということから、不効用の程度の格差に還元されるということになっているのであるが、このような諸労働間の熟練、辛さの格差の相対的な度合いは、市場メカニズムをつうじての賃金構造〔競争的賃金構造——なお、ホランダーは、賃金構造の決定についてのスミスのより詳細な説明は『国富論』第1篇第10章のなかにみられるとして、そこでのスミスの議論を検討するとともに、賃金構造についてのスミスの議論そのものは資源配分についての彼の議論と深い関連をもつものであって、「真実価値」の尺度という脈絡のなかでのみとらえられるべきものではない、と

するのであった——]のなかにおおまかに反映されることになる、とされている。したがって、賃金単位数に換算しての——おそらく不熟練労働に当てはまる率を使用しての——産出物の価値〔つまり、産出物の貨幣価値 / (おそらく不熟練労働に当てはまる率の) 賃金単位 = その産出物によって支配される賃金単位数, 労働量〕が、不効用としての「支配される労働」の量を、〔その産出物の労働不効用支配力の大きさ, その意味でその産出物に対応する労働不効用を,〕完全にではないとしても、まずまず測定することになる、というのがスミスの見解であったように思える。〔なお、事実上、この方法によって、その産出物のもつ諸商品に対する実質購買力を間接的に測定するものとしての「支配される労働」量も得られることになる、といえる。〕⁽²⁾しかしながらスミスはまた、賃金単位を用いて「支配される労働」量を算出するというこのようなやり方には労働の時価〔賃金単位の大きさ〕を知らなければならないという統計上の困難性が存在すると考えたのであるが、その問題に対してスミスは、穀物の時価は労働の時価よりもよく知られており、しかも、穀物の時価はふつう入手できるもののなかでは労働の時価ともっとも同一割合に近い関係をもつのであり、さらに、穀物は労働者の生活資料であるため、長期的には、等量の穀物は、他のどんな商品の等量をもってするよりも、等量に近い労働を支配する、と考えた〔→したがって長期では、産出物の貨幣価値を穀物価格ではかつてその産出物に対応する穀物の量を知ることによって(産出物の貨幣価値 / 穀物価格 = その産出物に対応する穀物の量), その産出物が支配しうる労働量の程度を知ることができ、異時点間にわたってのその比較が可能ということになる。〕。このような意味でスミスは穀物を次善のものとして選択したのである。ただし、その選択をさらに正当化するためにスミスは穀物の生産費はほぼ一定であるということあげているが、それは当をえたものではない。